

本科 2 期 12 月度

解答

Z会東大進学教室

東大国語



【添削課題】

出典：（作者未詳）『かざしの姫君』／オリジナル問題

現代語訳

こうして（姫君は）気分がすぐれないようにおなりあそばしたので、乳母はどうしたことかと悲しんで、（姫君の）母上にこの（姫の不例のこと）を御報告申し上げたところ、（それを聞いて母上だけでなく父の）中納言さまも動搖なさつて、あれこれと御介抱になるのだが、その効き目もないのだつた。（そこで困つた）乳母は、神に仕える祈禱師のところへ行つて、「（今年で）お年が十五歳になりあそばすおひいさまが、九月の三十日〔＝陰暦では秋の終り……菊の季節の終り〕の日暮れごろから、御様子がお変わりあそばしたのは、いつたいどういうことでございましょうか。どうぞ占つてくださいまし」と申し上げたところ、祈禱師が申したことには、「何とも判断のしにくい占い（の結果）でございます。もしや（その姫君は）ふつうではないおからだ〔＝御懐妊〕になつておいでなのではなかろうか。どう見ても心配な御託宣（が出ているの）でございます」と（いう説明が）あつたので、乳母は思いがけない感じがして、急いで帰つて、（姫君の）母上にこのように（御託宣が出ました）と申し上げなさつたところ、奥方さまがおつしやつたことには、「わたくしもそのように（姫が身ごもつてゐるのではないかと）見受けていたのですが、そういうことは乳母（であるおまえ）が気がつかずにはまさかないだらうと思つておりましたので、（先を越してわたくしの口から）言い出すようなことも、なんといつてもやはり（姫の養育を任せたおまえに対して差し出がましいか）と思つて（ためらつて）いたのです。それにしても（姫が身ごもるとは）どういうことだつたのでしようか、（相手は誰なのか）うまくその気にさせて聞き出してくださいよ」とおつしやつたので、乳母は（姫君の暮らす）対の屋に参つて姫君のお側近くにあがつて、申し上げることには、「（おひいさまの）お姿を見ますと、（赤ちゃんを身ごもつたせいで）ふつうではない御体調と見受けられますわよ。このばあやにいつたい何をお隠しあそばすことがございましょうか（いいえ、何もお隠しならなくてもよろしゅうございますのよ）。お心のうち（にあること）を（このばあやにだけは）お漏らしあそ

ばしませ」と、細やかに（あれこれなだめすかすように）ささやいたところ、姫君がお思いあそばしたことには、（自分が身重になつてしまつては）とても隠しあおせることはできるものではないのだから、話し（てしまい）たいとお思いあそばして、恥ずかしく思ひながらも、（菊の精との間柄の）始めから終わりまでの事々を、残らず申し上げたところ、乳母は心底おどろいたことであつた。（事情がわかつた）乳母が奥方さま（のところ）へ参つて、ありのままに御報告したところ、（父の）中納言さまも（それを）お耳になさつて、「何に比べようもないほど情けないことだ、（姫の）入内のことばかりをこれまでずっと願つてきたのに、（姫が懷妊したとあつては、姫の入内が不可能になつた）このまま終わつてしまつばかりであるような（ことでは何とも）残念なことよ」と（お歎きになつたが、もうどうしようもなく）て、（そのまま日々を）うち過ごさせなさる（のであつた）。

解答

- (一) ア＝周囲の人々の介抱の効きめもなかつた。
イ＝もしや姫君は御懷妊になつておられるのかもしれない。
エ＝うまく話す気にさせて懷妊の事情を聞き出してください。
オ＝私には何もお隠しにならなくともよいのですよ。
- (二) 姫君の母は娘の懷妊に気付いていたが、娘の後見役である乳母からの報告を待つていたということ。
- (三) 親にも乳母にも内緒で貴公子と密会していたのを隠し通すことはできないと姫君が考えたということ。
- (四) 自分の知らないうちに姫君が男を通わせていたと聞いたから。
- (五) 中納言は娘を入内させる心算だったので、娘が隠れて恋人を通わせていたのをこのうえなく殘念に思う気持ち。

【問題】（自習）

出典…上野千鶴子『ミッドナイトコール』〈国境〉の全文（朝日新聞社・一九九〇年）／オリジナル問題

文章略解

国境とは、社会と社会との間に人為的に上下差を作り出す「堰」のようなものだ。「豊かな社会」に惹かれた人々がこの「堰」を越えようとする勢いはもはや抗しがたい状況になつていて。しかしながら「豊かな国」ニッポンでは、「堰」の内側で既得の利益を守ろうとする集団エゴイズム＝多国籍化が先に立ち、国境を越えた富や権利の平準化＝国際化の実現にはほど遠い。日本人である限り、この集団エゴイズムから無縁ではありえないのだ。

解答

(一) 国境には、人々が自然に動く流れを無理に堰き止めて、社会的な格差を意図的に発生させる装置という性格があること。

(二) 望ましくない現実を原則論で否定するのではなく、とりあえずは容認して対処するしたたかな発想がアメリカ人にはあるということ。

(三) 前者は国境の存在に基づく富の偏在を利用する動きであり、後者は国境を越えて富や人権を平準化させようとする動きである。

(四) 他との格差によつて富を得ている日本の現状に疑問を感じつつ、その恩恵にあずかる自分自身を後ろめたく思う気持ち。

解説

(一) 傍線部説明問題。基本的な考え方は比喩説明と同じ。どういう点で「国境」＝「堰」という等号が成り立つかを指摘してやればよい。普通の比喩説明の問題であれば、ここから「堰」という比喩のイメージに即しながら「国境」という比喩されているものとの

共通点を抽出するという作業へと進んでいくのだが、この場合は傍線部に「巨大な水圧に耐えながら、無理無体に社会と社会の間に水位の差をつくり出す」という修飾部があるので、ここを活用してやればよい。つまり、この修飾部こそが「国境」と「堰」との共通点なのだから、この部分を「国境」に即して言い直していくべきことである。まずはこのような方針がすぐに立つたかどうか、自己確認しておこう。記述答案への対処法は無数にあるわけではない。基本的な数種類の考え方の組み合わせで勝負は決まるのだから、こういう基本をおろそかにしてはいけない。

右のような方針が立つたら、次はその傍線部から説明すべきポイントを絞っていく。この場合は「巨大な水圧（に耐えながら）」「無理無体に」「社会と社会の間（に）」「水位の差（をつくり出す）」くらいに分けてから考えていくのがよいだろう。

「巨大な水圧」だが、「水位の差」とともに、この設問での核となるもの。傍線部に続く箇所を見ると、「巨大な水圧」とは「『自由』や『豊かさ』や『権利』などの差としてあらわれる」「水位の差があるかぎり」避けられないものとされており、アメリカとメキシコとの国境線を「まるで水が堰を浸み出るよう」に、毎年何万人ものメキシコ人が越える」という比喩をヒントにすれば、水=人々（こではメキシコ人）という関係から、巨大な水圧=多くの人々が移動する動き・多くの人々が移動しようとする欲求、という関係が導き出せよう。また、同じ箇所から、「水位の差」「自由」や「豊かさ」や「権利」などの差、という関係も見出せる。しかし、二行という解答欄を鑑みると、とても具体例を挙げているゆとりはない。ここは「社会と社会の間」の説明と併せて、「社会間格差」などとしておくのがうまい。残った「無理無体に」は「無理に」くらいにしてこのまま使つてやればよい。

以上を組み合させて答案とする。

(二) 傍線部説明問題。この場合のように傍線部が抽象的・概念的な言葉の場合は、それを文脈に即して具体化していくというのが基本的な方針。要は、その文脈においてどういふことを言つてゐるのかを説明すればよい、ということである。

「プラグマティズム (pragmatism)」とは「実用主義」ということだが、言葉を知らなくても「取り消せない現実なら受け容れてその次を考えよう」という修飾部をヒントにすれば意味は容易に分かるはず。その上で、これをどう料理していくかということが鍵になるのだが、ここは「追いかえしても追いかえしても、ビザも持たずに新たにやつてくる彼らに……ギブアップして」受け容れを決めたという経緯、及び筆者が国境を越えようとする人々の動きを堰き止めるか否かという点を本文で問題にしていることから、〈対比〉的に「～ではなく～」の形にまとめていくのがうまいだろう。

右のような方針が定まれば、あとは「ヒスパニック系の人々を追いかえす」＝原理原則に固執する考え方、「ヒスパニック系の人々を受け容れる」＝現実に柔軟に対応していく考え方、のようく〈対比〉を鮮明に打ち出してまとめていけばよい（〈対比〉の説明については次の解説も参照）。その際、「イズム」の説明なのだから「考え方」「発想」などの言葉を忘れないように。「どういうことか」と聞かれると「～ということ」と反射的に書いてしまう諸君が多いようだが、説明すべき言葉が体言の場合にその体言の説明を忘れてしまつては元も子もない（特に東大の指示語問題では指示語のかかる体言のニュアンスに注意しよう）。

(三) 相違説明。相違説明は基本的に「前者は～であるのに対し、後者は一である」という形式にまとめてやればよい。攻め方がワンパートーンなので、比較的攻略しやすい設問である。その際注意することはたった一つ。大学側が聞いているのは二者の違いなのだから、それぞれの説明に終始してしまわないよう、〈対比〉に注意して「～」と「一」とをまとめることがある。相違説明に限らず、〈対比〉読解を行うときには、どういう点で両者が異なっているのかという点を強く意識するように心がけよう。〈対比〉読解が絡む記述での出来不出来は、ひとえにこの作業にかかっていると言つても過言ではない。

この場合は直後の「国境を越えた富や権利の平準化」「落差のある複数の社会に足をかけることで、その水位の差から利益を得ている、そのしくみ」というのがヒントになる。しかし、これをそのまま使つても論点のぼやけた答案にしかならない。それゆえ、強調すべきポイントをしつかり意識してまとめ直す作業が必要となる。ここで押さえるべきポイントは、「国境」への対応の仕方という点である。これを越えていこう・なくそうとする動きが「国際化」、またこれを利用しよう・保持しようとする動きが「多国籍化」ということになる。まとめれば、

- ①多国籍化＝利潤を得るために、国家間の格差を積極的に生み出そう（保持しよう）とする動き
- ②国際化＝国家間の格差をなくし平準化を目指そうとする動き

ということである。ただ、ここでは本文に「水位の差から利益を得ている、そのしくみのことを多国籍化というのだ」と明言されているので、前者については多少歩み寄つておいた方が無難であろう。

(四) 心情説明。現代文（評論）よりも古文や漢文で多い設問形式だが、攻め方は変わらない。基本的には、その心情にいたりつくまでのプロセスを説明してやればよい。したがつて、「～に対する～という気持ち」のような形式にまとめるつもりで書いていくとうま

くいくことが多い。

この場合「～」が「わたし」であることは傍線部から明らかだが、だからといって「自分自身に対する」とだけしたのでは、何故「有罪」だろうか」という心情に至りつくのかがわからない。心情説明で大切なのは「その心情にいたりつくまでのプロセス」なのだから、この場合のように単に「～」を指摘しただけではプロセス（＝理由）が不分明な場合には更にその理由についても書くことが求められる。そこで注意したいのが「やはり」である。「わたしもやはり～」というのは、ひょっとしたら「無罪」ではないかと思つていたが……、という含みを持つ。それゆえ、「わたし」の説明には「無罪」になる要素と「有罪」になる要素の両方が必要ということになる。32～33行目の「わたしもまた、このしくみから無実ではない」も参考にすると、「有罪」の要素としては、直前に書かれている、円高（＝多国籍化によつてもたらされたもの）のおかげでスペインでのんびりしているという現実、「無罪」の要素としては、その「多国籍化」への否定的ないし懷疑的な意見を持つていてこと、が挙げられるだろう。

残った「～」だが、「有罪」なのだろうか」というのだから、「後ろめたい」「罪の意識を感じている」などの言葉で説明しておけばよい。「～」を説明する場合には、あまり神経質になりすぎないことが大切。この手の説明では「心配・憤り・悲哀・驚き」など一般的な言葉で十分なのであつて、ここで細かい説明をしようとするとかえつて失敗する。それは「～」の方、つまりプロセスの説明にまかしておいて、心情そのものは基本的な語彙を用いてやるとよい。

【問題】（演習）

出典：安野光雅『狩人日記』「道」（文藝春秋社）／オリジナル問題

文章略解

私が買った土地には、以前から人々が通るうちに自然にできた小みちがあった。道の生成消滅は、人生の考古学的原型に通ずる。人は、無意識に同じことを繰り返していたり、以前の経験をなぞつていてる錯覚にとらわれたりするよう、同じ道を何度も通ることがある。人の移動の軌跡は、その人生の舞台である。私の移動の軌跡は拡散しているが面にはなり得ない。多くの人が踏み固めた郷里の小みちを歩いて、私も自分の人生の原点を確かめたい。

解答

- (一) 原因が判らず他人にも伝達不能な、自分の感覚の統御を失った状況を面白がり、敢えて身をまかせる気持ち。
- (二) 人生の原型が移動だと考えれば、仕事と家庭のどちらを重視しても、人生の中心は二点間の往復となるから。
- (三) 人生にも喻えられる道の原型を歩くことで、散漫になっていた自分の人生の原点を確かめたいということ。

【問題】(自題)

出典…『全唐詩話』+『蒙求』／ オリジナル問題

書き下し文

〔I〕帝嘗て宮体詩を作り、虞世南をして賛和せしむ。世南曰はく、「聖作誠に工なり。然れども体雅正に非ず。上好む所あれば、下必ず甚だしき有り。恐らくは此の詩一たび伝はらば、天下風靡せん。敢て詔を奉ぜず」と。帝曰はく、「朕卿を試みしのみ」と。後に帝詩一篇を為り、古の興亡を述ぶ。既にして嘆じて曰はく、「鍾子期死し、伯牙復た琴を鼓せず。朕の此の詩、何の示す所あらんや」と。褚遂良に敕し、世南の靈座に即きて、之を焚かしむ。

〔II〕『列子』に曰はく、「伯牙善く琴を鼓し、鍾子期善く聴けり。伯牙の念ふ所、子期必ず之を得たり」と。『呂氏春秋』に曰はく、「鍾子期死し、伯牙琴を破り絃を絶ちて、終身復た琴を鼓せず。以為へらく世に復た為に琴を鼓するに足る者無し」と。

現代語訳

〔I〕太宗があるとき宮体詩を作つて、虞世南に唱和させようとした。(すると)世南が言つた、「陛下の御作品は本当に技巧的で優れておいでになります。しかし、詩全体の様子や雰囲気は、典雅端正ではございません。陛下が(何かを)お好みになることがあると、臣下は(陛下のお好みに追従して)必ずそれ以上に程度がひどくなるものでござります。(私が)憂慮いたしますのは、(もし)この詩がいったん(世に)公表されれば、下々に至るまで(陛下の作風に)なびき従い、(このような柔弱な作風の詩が)流行することとなるのでありますまいか(ということでございます)。(そういうわけで、)どうしても陛下の御下命をお受けするわけにはまいりませぬ」と。(すると)太宗は言つた、「(いやいや)私はそなた(の考え方)を試し(に聞い)てみただけだよ」と。

その後、太宗は一篇の詩を作り、(その詩に)昔(から)の(さまざまなかつての思い)を詠み込んだ。(しかし太宗は)やがてため息をつきながら言つた、「鍾子期が死ぬと、伯牙はその後二度と琴を弾かなかつた(という)。私のこの詩は、(それを)見せるどんな相手があろうか(いや、この詩を披露するにふさわしい人はもういないのだ)」

と。（そして太宗は）褚遂良に命令を下して、虞世南の靈をまつてあるところに持つて行かせて、（その靈廟の前で虞世南の靈に供えるために）その自分の作った詩を焼かせ（、虞世南がその詩をよろこんでくれるよう祈つ）た。

〔Ⅱ〕『列氏』に次のように伝えられている、「（琴の名手であった）伯牙は実に見事に琴を弾き、（その親友の）鍾子期は実に的確に（その演奏を）聴き分けた。伯牙が心に抱く思いは、鍾子期は間違いなくそ（の伯牙の演奏に込められた思い）を感じ取ったのである」と。（さらに）『呂氏春秋』には次のように書かれている、「鍒子期が死ぬと、伯牙は琴を壊し（その）絃を断ち切って、その後の生涯では二度と琴を弾かなかつた。（それは、伯牙が、鍒子期のほかには）世の中に再び（その人の）ために琴を弾いて聞かせる価値のある相手がいないと思った（からである）」と。

解答

- (一) 天子の作風は典雅端正であるべきなのに、宮体詩は柔弱で世の風俗を乱しかねないと考えたから、唱和しなかつた。
- (二) もしこの陛下の詩がいつたん臣下に公表されたなら、世間が靡き従つて宮体詩が流行するのではないかと心配です。
- (三) 「朕」＝帝 「卿」＝虞世南
- (四) 太宗自身を伯牙に、虞世南を鍒子期になぞらえて、虞世南の死後は、太宗の詩とそこに込めた心とを真に理解できるものはもういないと思つたから。
- (五) 太宗が、褚遂良に、太宗の作った古の興亡を述べた詩を、焚かせた。
- (六) 死ぬまでもう二度と琴を弾かなかつた。

(一) 傍線部の『使役』の助字はあつさり「しム」と読まれているが、この設問では、設問文のなかで「唱和したのか、しなかったのか」と言うことによって、「しム」の解釈を「させた」ではなく「させようとした」とすべきことを出題者が示唆している。そのつもりで問題文を読み進めると、傍線部の命令に対する虞世南の返事は、問題文2行目で終っている。(この文の書き下し文の文末に対応する漢字は、問題文中では文頭の「不」で、ここに送り仮名「ト」がある。) そこでこれを虞世南の結論と見ると、そこに「不敢奉詔」とあり、「詔勅を奉戴するわけにはいかない」と言っているのだから、勅命を拒絶していることがわかる。答案末尾を端的に「唱和しなかつた。」とすることを決定して、これで8字だから、残り40字強で「なぜか」に答える。(なお、東大の古文・漢文の出題には、この設問のような「どういうことか、また、それはなぜか」という複合問題もまま見られる。字数を節減するために、答案を書くに際しては「前提→帰結」の順になおして書くことが望ましい。)

さて、「なぜか」という表現は『前提』を問うもので、具体的には〈根拠〉・〈原因〉・〈理由〉・〈目的〉のどれかに当たるはずだ。(ついでに言うと、〈根拠〉・〈原因〉・〈理由〉なら「～から。」、〈目的〉なら「～するため。」と回答することになる。) ここでは、『帰結』が「勅命の拒絶」という〈行為〉なのだから、その『前提』は〈理由〉または〈目的〉のどちらかだろう。(こ)でかりに〈目的〉だとすれば、設問部分に統いてその目的が達成されたことがわかる表現があるはずだが、問題文では太宗が「いやちょっと聞いてみただけだよ」と冗談めかす言葉でごまかして前半の段落が終っている。(『後帝為詩一篇』以降は後日談であり、(こ)から後半段落になると読むべきである。) たしかに太宗は後にこそ立派な詩を作っているが、それは虞世南の死後のことだから、虞世南がその実現を目的としたと考えるには時間的に少々遠い。とすれば、虞世南が傍線部に先立つて述べた彼の考え方を解釈し、これを〈理由〉として答案要素とすればよい。

すると問題文2行目に「恐……」という文が見える。これで自分が太宗のいいなりに唱和することの結果として悪いことがおこるのを憂慮していることがわかるので、これを中心にまとめてゆく。

ここで、右に見た「恐……」は次の設問で現代語訳が要求される箇所である。これで、「複数の設問が同一箇所を参照する場合、直接的な設問を先に片付ける」という原則に従つて、先に(二)を解いてからこの(一)を解くべきこともわかる。この続きを読むのは、(二)の解説を読んだ後がよい。

さてその『前提』だが、右に見た「恐(=憂慮)」の具体的な内容は「天下風靡」とある。その前提が「上有所好、下必有甚焉」で、

これは「臣下は上意に迎合しがちだ」と解釈すべきこところだ。しかしこれを使うと、虞世南は「私が上意に従えば他の皆も上意に従うようになるだろう」と言っていることになりかねず、これ自体はむしろそうあるべきことなのだから、それでは筋が通らない。

そこでさらに遡ると「体非雅正」が見つかる。この「体」が文章冒頭に見える「宮体詩」の詩体にあたることは明らかで、その「宮体詩」は〔注〕によれば「修辞をこらし、恋愛や甘美な感傷を詠じたもの」だ。これが「雅正ではない」というのだから、「皇帝は天子・為政者として宮体詩でなく『雅正』な詩を作るべきだ」と言いたいのだとわかるだろう。「修辞的で柔弱」の反対に「質直で剛毅」の方向になるように「雅」・「正」を含む熟語を探して表現する。

ただし、「雅正」ではないから唱和しなかった」では因果関係の説明が不十分だ。ここで、「聖作」が「非雅正」であることの結果としての「恐……」の意味するところを「説明」に組み込むことになる。〔2〕でも見たように、虞世南は臣下が迎合して宮体詩が流行することを危惧している。ただし、安直に「心配したから唱和しなかった」では〔1〕の答案と内容が重複してしまう。そこで、「宮体詩の流行」の問題点を考えて、「風俗紊乱に対する危惧」を答案要素とすればよい。

参考までに、《帰結》部に相当する「不敢奉詔」の「敢」は副詞だが、《様態》を示すものであつて《程度》の副詞ではないから、「不敢……」は《部分否定》にはならない。またこれを逆転した「敢不……」は《否定文の反語》すなわち《二重否定》を示し、結果的には《肯定文の強調》に等しい。

(1) 「恐……」は「……を恐る」と読むこともできるが、一般的には「恐らくは……(せ)ん」の形に読む。(「曰……」を「……と曰ふ」でなく「曰く……と」と読むのと同じ発想だ) その「恐らくは」は「恐る」の《ク語法》に係助詞の「は」を付けた形だが、ここに注意すべきは現代語の「おそらく」とのズレだ。現代語の「おそらく」は《推量》一般に用いることができるようになったと見てよいが、語源は漢字に明らかなように「おそれ」を意味する表現で、英語の *be afraid of* のように危惧の念を含む。さらに、《ク語法》に気付いてもそれを機械的に「私が心配することには……してしまうだろう」などとしてしまうと答案の字数を無駄にするので、「……を恐れている」のつもりで文末に「恐」のニュアンスを出すほうがよい。となると答案末尾が単純な推量(「だろう」など)では不十分で、「心配・憂慮・危惧」などの言葉でまとめなければならない。

次に、「此詩」という指示語を含む名詞句を具体化してやる必要がある。詩の性質を具体的に説明することもできるが、それは(1)として詩の性質を用いて説明すべき関連問題が出されているのだから、詩の作者に言及すれば十分だ。

「伝」は「詩」を主語とする述語だから《自動詞》だとわかる（問題文中でも「伝はる」と訓読している）が、詳しくは《不完全自動詞》で《補語》を必要とする。それが書かれていないので、《伝達の相手》を補う必要がある。ここでは直前の文の「下」を探るのが妥当だが、続く傍線部中に「天下」とあるので、傍線部前の「下」もうつかり「天下」とやつてしまいそうだ。しかし、この段階で「天下」とするのは少々まずい。漢文の「天下」は「国家」と違って民衆まですべての人を含むが、当時の中国で「漢詩」をたしなむのは、大雑把に言うと「士大夫」階級以上の人々であり、（科挙に合格するまでは民間人だから、たしかに漢文で言う「国家」すなわち「官僚機構」に組み込まれていない人々も含む階級ではあるが）人口の中では少数派である。そこで、問題文の文脈に沿つて皇帝の詩が広まる仮想的な過程を考えてみると、「皇帝の作詩→名臣による唱和→朝廷内で公表→宮廷に流布→貴族・官僚による迎合→科挙合格を願う受験生による追従」とでもいったところだろう。この最終段階を傍線部中で少々大きさに「天下」と表現したと考えて、補うべき補語は、その前の段階の「貴族・官僚」を端的に表現する言葉として「臣下」とするのが妥当だろう。

さて、傍線部後半の「天下」は、日本語でもよく使われる言葉だ。しかしここは慎重に行こう。そもそも設問に言う「平易な現代語」というのは、入試漢文の「お約束」として、「答案に用いるべき語彙を現代日本語（の書き言葉）に限る」ということを含意し、具体的には「（固有名詞以外の）漢文中の語彙は排除する」ことが原則となる。問題文中の「天下」は「古典中國語」として使われたものだから、なるべくなら文脈に沿った現代日本語に置き換える。右に見た考え方から、この「天下」は「貴族・官僚のみならず在野の知識人階級までを含む」と解釈すべきだが、制限字数に鑑みてここでは「世間」程度の言葉で十分だろう。

最後の「風靡」も、「一世を風靡する」という慣用句として日本語でも一般的な言葉だが、右の原則に照らして、安易に答案に使わないこと。答案末尾を「……が心配だ」の形にまとめるなどを意識して、心配の内容「宮体詩の流行」を具体化することを考えよう。

(三) 「朕」が「天子の自称」であることは常識だ。（辞書を引くと「古代中国では一般に用いられたが、秦の始皇帝のとき天子専用と定められた」などと書いてあるだろうが、入試漢文では先秦の文献でも一般的自称としての表現はまずないから気にしなくてよい。）

むしろ問題は、答案として2行目の「上」を挙げてしまいがちだということだ。

「上」には「皇帝・天子」を婉曲に指す名詞としての用法がある。そのような用法のときは「ショウ」（「ジョウ」ではない）と音読みされることも憶えておく必要がある。ただし、問題文2行目の「上有所好、下必有甚焉」は、(二)の傍線部で虞世南が主張するこ

との根拠として挙げられた文だから、「太宗」個人を指すのではなく、一般論として天子と臣下との関係を述べたと解釈するのが妥当だ。これに対して、問題文中の「帝」は、詩を作つたり虞世南を思い出したりする主体として表現されているから、「太宗」個人を指すことになる。正解は「帝」。

「卿」にもさまざまな用法があるが、文中では3行目の一ヶ所だけだ。「朕試卿爾」とあるので、主体「朕」による「試」という行為の客体であることがわかり、このようなときは「貴族の地位にあるものに対する敬意を含んだ《対称（＝二人称）》の代名詞」として働いている。「虞世南」は二度目の言及以降は「世南」と書いてあるから、この文章の設問に対する答えとしては「世南」でもよいだろうが、字数制限でもないかぎりフルネームで書こう。（中国には「復姓」といって二文字の名字も多い。「公孫」「司馬」「諸葛」「歐陽」などは諸君も知っているだろう。氏名が三文字だからといって名字を一文字と決めつけるのは危険だ。）

(四) 設問に従つて〔I〕と〔II〕との関係を探ると、「芸術に関する話題であること（漢詩／音楽）」・「表現者がいること（太宗／伯牙）」・「鑑賞者がいること（虞世南／鍾子期）」・「鑑賞者の死後、表現者は芸術の表現を断念したこと」などが共通している。そこで、傍線部の「嘆」の主體が太宗すなわち〔I〕の「表現者」であることに鑑みて、〔II〕の「表現者」＝伯牙を主體とする心理表現を探すと、〔II〕の2行目の「以為」が見つかり、その内容「世無足復為鼓琴者」が〔I〕の「嘆」に対応することになる。

右の「鼓琴」の結果を見ると、「鑑賞者」＝鍾子期は生前は「必得之」だった。これを〔I〕の「鑑賞者」＝虞世南にあてはめると、「聖作誠工」という発言から「作品自体の出来栄えを評価する鑑賞力」を有することがわかり、また「体非雅正」と言われた太宗が後に「古興亡」を述べる詩を作つたことから「作品に込められた表現意図・真意を理解する鑑賞力」をも有することがわかる。それだけの力を持つた受け手が「世無足復為「作詩」者」となつてしまつたから、「嘆」いているわけだ。

右のことを具体的に表現すると30字程度は必要になるので、あとは設問に言う「鍾子期と伯牙との関係に関連させて」をいかにコンパクトに表現するかに注意。これが「……関係を参考に」といった表現なら答案としては〔II〕の文中の要素だけで十分だが、設問で「関連させて」と言われた以上、〔I〕の要素も表現しなければならない。しかし「琴の演奏の出来栄えと表現意図とを理解したように」などとやつていては、答案字数がまったく足りない。そこで、〔I〕と〔II〕とそれの中での「表現者と鑑賞者との関係」は共通なのだから、「〔I〕の人物と〔II〕の人物との対応」を明示すれば、出題意図を満たすことになる。

答案をまとめるにあたっては、太宗を指すつもりで不用意に「自分」などと書かないこと。答案の構文によつては、指示対象が確定できなかつたり受験生の意図とは異なる人を指すように読まれたりしがちだ。設問は「太宗の立場からの説明」を要求しているわけではないのだから、答案としては第三者の立場からすべて固有名詞で表現するとよい。

なお、傍線部の「既」には「ニシテ」と送つてある。「すでニシテ」と読まれる場合、「すでニ」とは異なる意味で解釈する。(二)の文脈でも、「せつかく素晴らしい詩を作つたのに、いつたん作り上げたその後になつて」といつたニュアンスで用いられている。) ただし入試問題では「すでニシテ」と読むべき場合もとぼけて「すでニ」としか送らないことがある。「既」の複数の用法を各自確認しておくとよい。またなお、「已」や「業」にも「すでニ」という読みかたがあるが、これらもまた異なる用法を持つ。あわせて確認し、混同のないようにしておくことを勧める。

(五) 傍線部の送り仮名でも設問文中の表現でも、傍線部が《使役》を含意することは明示されているので、人物関係に関してはさほど難しい問題ではない。注意すべきは次の三点だ。

その一。答案要素は三項目求められている。「誰が」・「誰に」については人名で答えるから一文節となり、字数が短い。よつて答案字数の大半は「何を」に費やすことになる。そこでついつい字数の多い要素を答案の先に出したくなるだろう。しかし、答案は單なる「解答」ではなく、あくまで「回答」でなければならない。設問で要求された順序を守る必要がある。その際に、字数の少ない要素を先に出すのだから、係り受けを誤解されないために、格助詞「が」・「に」のあとに必ず読点を打つことも忘れないようにしよう。

その二。「何を」については、一語で言えば「詩を」で、最も近いのは同じ行の「朕此詩」だから「太宗の詩」を意味する。ここまではだれでも気付く。問題はその後で、問題文中に「太宗の詩」は「首言及されていることが設問に関わってくる。答案に「太宗の詩を」としか書かずにおくと、採点者に「両首とも焚かせたと考へたな」と解釈されて、減点させるスキを与えることになる。(下手をすると「それまでに太宗が作つてきた詩のすべてを焚かせたとでもいうのか」などとツッコミを喰らうことも考えられる。) どちらの詩のことか特定できる表現にしなければならない。四と関連して、太宗は自作の詩を最も聞かせたい相手がこの世にいないことを嘆いている。その嘆きのもとに「自分の地位に相応しい詩を作つた」との自負があることは明白だ。

その三。細かいことだが、設問は「誰が・誰に」も要求している。答案末尾を体言止めでなく述語表現にしておくこと。

(六)

熟語「終身」は日本語でもそのまま通用するが、(二)でも述べたとおり入試の答案としては別表現に書き変えることが求められる。「終身雇用」・「終身刑」などの用法や、「終日」・「終夜」などの同発想の熟語が参考になる。

「不復」も《部分否定》と混同しやすい表現だが、これは「くりかえし」が否定されているのであって、ある時点以降はすべて否定される。(部分否定なら送り仮名に「は・しも」などを付け足して訓読する約束があるが、「不復」の「復」を「または」などと読むことがないことからもわかるだろう。)

しかし右の二点程度はこの時期の東大受験生なら言うまでもないことだろう。むしろこの時期に注意すべきは、「鼓す（＝演奏する）」に補語成分を補つてはならない、ということだ。傍線部に統いて「為鼓琴」とあって、「ダレソレのために演奏する」という文型になつていることに気を取られると、つい「鍾子期のために」などと書いてしまいがちだ。しかしそれでは「鍾子期以外の誰かのために」あるいは「自分自身に向かつて」なら琴の演奏を続けたことを意味し、「不復」を《部分否定》で解釈したに等しいミスを犯したことになる。なんでもかんでも補えばよいというものではない。文脈に忠実な答案を心がけよう。

なお、出題条件（リード文）に言う「伯牙と鍾子期との故事」から「知音」という成語が生まれていることは、この時期だから知っている諸君も多いだろう。成語のもとになつた故事だとすることに自力で気付いていたらそれでよいが、気付かなかつたとしたら成語の意味を誤解している可能性が高い。「ちいん」という読みにも注意しながら、意味を調べて憶えておくとよい。

●
×
毛
●

【問題】（演習）

出典：蘇軾『東坡題跋』／オリジナル問題

書き下し文

己卯の上元、余儋州に在り。老書生數人有りて來り過りて曰く、「良月嘉夜、先生能く一たび出づるか」と。余欣然として之に従ふ。西城に歩み、僧舍に入り、小巷を歷るに、民夷雜揉、屠沽紛然たり。舍に帰れば已に三鼓、舍中閑を掩ひて熟睡し、已に再鼾なり。杖を放ちて笑ふ。孰れか得失と為すと。過問ふ、「先生何をか笑ふ」と。蓋し自ら笑ふなり。然れども亦韓退之の魚を釣りて得る無くんば、更に遠く去らんと欲して、海を走る者未だ必ずしも大魚を得ざるを知らざるを笑ふなり。

現代語訳

(元符二年) 己卯の上元節、私は(配流されて) 儉州にいた。(私の許に) 老書生が數人いて、(彼らが) やつて来て(私の部屋に) 立ち寄つて(このように) 言(つて私を誘)つた。「きれいな満月の(出ている)めでたい夜です。先生、ちょっと外出できませんか」。私は喜んで彼らに従つ(て夜歩きをすることにした)。街の西の区域を散歩し、僧院に入り、小さな路地を巡つてみると、市民も異民族も入り交じり、食い物屋(や飲み屋)が軒を並べて店を開いて(賑わつて)いた。家に帰るとすでに真夜中で、家内(の者)は(みな部屋の)扉を閉じて寝入つていて、早くも繰り返し鼾をかいている(状態だった)。(私は持つていた)杖を拋り投げて笑つた。(わざわざ夜歩きに出かけてむなしく帰ってきた私と、こうやつて早々に眠つている家内の者と)どちらが得をしてどちらが損をしたのか。(そんな私を息子の)過が(見て)尋ねる。「父上、何を笑つていらつしやるのですか」と。たぶん自分で自分を笑つていたのだ。しかし同時に、韓退之が「(大きな)魚を釣ろうとして手に入らなければ」「期待した大魚が釣れなければ」、もつと遠くに行こう「(水たまりに)大魚がいるはずもないから、大魚のいそぐな大海に出よう」などと考えて「(言つていて)」、(彼は)海を渡る者が必ずしも大

魚を手に入れるとは限らない「『欲しいものが手に入るとは限らない』ことを知らないことをも笑ったのだ。

解答

- (一) 蘇先生、ちょっと外出できませんか。
扉を閉め切つて寝入つていて、早くもくりかえし鼾をかいでいる。
- (二) 街が市民と異民族とでごった返し、飲食店が軒を並べて店を開いているにぎやかな状態。
- (三) 上元節の好夜に、刺激を求めて外出するのと、ただ部屋で寝ているのと、どちらが得でどちらが損なのかわからない。
- (四) 無意味な外出をしたことと、徒労に終つた自らの官僚としての行動を重ね合わせ、自嘲の念にかられたから。
- (五) 自らの理念に従つて積極的に行動することが、かならずしも良い結果をもたらすとはかぎらないということ。

【問題】（自習）

出典：作者不詳『平中物語』冒頭の一節／オリジナル問題

現代語訳

今（となつて）は昔（のことになつてしまつたが）、二人の男が（一緒に）一人の女に結婚を申し込んだ。先立つて（その女に）言い寄つた男は、（もうひとりの男より）官位が高くて、その当時の帝に側近くお仕え申し上げており、（これに対し）あとから言い寄つた（平中＝平貞文という）男は、その同じ帝の母上にあたる皇太后的血縁の人で（あつたが）、官位は（恋敵の男よりも）低かつた。ところが、（女は）どう思つたのであろうか、あとの男に傾いた。

そういうわけなので、この初めの（先に結婚を申し込んで袖にされた）男は、この（女を）娶ることになった（平中という）男をひどく敵対視して、もろもろの（平中が）職務に熱心でない（と人に思わせるような、平中にとつて不都合な）ことを、なにかの機会あるごとに、帝が（平中は）無礼な男だとお思いになるほどのことを探造しては、（帝に平中を）中傷し申し上げているうちに、この（妻を得たほうの平中という）男もまた宮仕えをつらいことと考えて、ただあちらこちらと遊び歩くばかりで、衛府司での役所勤めも（ろくに）勤務しないというよくな状態が現れてきて、（どうとう帝は平中の）官職をお取り上げあそばし（罷免なさつ）たので、（平中は）世間（で暮らすこと）もいやになり、俗世とは交渉を断ち切つて、ただひたすら仏道修行に携わり、野にでも山にでも分け入つてしまおうと思つたが、（実はこの平中は、その両親が）ほんのわずかの間でさえ離そうとせず、父母がたいそう愛情を注いでいらっしゃる人なので、（世の中の）つらさ（に耐えきれず出家しようという気持ち）も、こ（の父母の情愛）に妨げられたのであつた。

ちょうどそのころ、（ただでさえ平中にとってはつらい時期だったが、まして人が物思いにふけりがちな）秋の時節にまでもあつたので、（平中には）たいへん寂しく感ぜられて、（自分の）気持ちひとつを慰めかねる夕暮れ時に次のように（歌を）詠んだ。

憂き世には……このつらい世の中には、（出られないように）門があつてとざしてあるとも思われないことなのに、どうして私の身は（この世を）出（て出家遁世す）ることがなかなかできないのだろうか

- (一) ア＝もう一人の男に遅れて女に結婚の申込みをしたほうの男
 イ＝自分の好きな女性を奪った男の陰口を帝に申し上げた
 オ＝どうして私はなかなか出家できないのだろうか

(二) 帝が平中の官職をお召し上げあそばし罷免なさつたので

(三) 俗世での生活がつらくて出家したいという願いも、父母の恩愛を思うと妨げられたということ。

解説

(一) 傍線部アのポイントは二つ。まずは「後より」で、ここから二者間の比較になつていてることがわかるので、これを答案に反映させること。解答では「遅れて／ほうの」という表現がこのことに対応している。もう一つは、「いひける」の「言ふ」の意味の理解を答案に反映させることだ。ここで比較の対象を見ると「先立ちてよりいひける」とあるので、二人とも同じことをしていることがわかり、ここから冒頭文の「男二人して女一人を呼ばひけり」の傍線部がその内容である、ととれる。「呼ばふ」はもともと「呼ぶ」に《反復継続》を示す古い助動詞「ふ」が接続して一語化したもので、恋を交わそうとする男女間において、古くは名前を問う男側からの問い合わせに応えて女が名前を明かすことが承諾の証だつたため、男が女との恋を成就するために女を呼びつけたことに由来するといわれる。したがつて、要するに「求婚」という内容が解答に反映されていればよい。

傍線部イは、「聞こゆ」が「言ふ」の謙譲語のひとつであることを踏まえれば、そこで表現された動作部分は「言ひそこなふ」ということだとつかめよう。ただし、現代語の感覚だけで考えると「言い間違う」の意味に取りやすいが、それでは後とつながらないので注意が必要である。

ポイントは、4行目の「このはじめの男」と「このもたりける男」のどちらが5行目で「この男」と表現されたのかを理解することである。ここでは、「はじめの男」が「もたりける男をぞいみじくあたみて」「聞こえそこなひけるあひだに」「この男」が「富仕へをば苦しき」とにし」たとあるのだから、「この男」は憎まれた側、すなわち「もたりける男」と考える。そこで「言ひそこなふ」

をもう一度吟味すると、「損なふ」の原義は「だめにする」なのであるから、「言う」とによつて（何かの）評価を下げる」とぐらに抽象化することができる。解答では「陰口」としておいたが、「中傷」などの語でもよい。あとは使える字数を有効に使って、「聞こえ」た相手と「そこな」つた相手とを補つておく。

傍線部才の連語「がてにす」は、「できる・耐える」意のたいへん古い補助動詞「かつ」の未然形に、打消の助動詞の連用形の古形「に」、さらにサ变动詞「す」が接続した「かてにす」が、連濁によつて濁音化したもの。したがつて本来「～できない・～に耐えられない」の意を示すことになるが、意味の似てゐるところから「難し」などと混同されつゝ、平安時代以降も歌語として残つた。そこでこの場合、同じ「～できない」のでも、「耐えられない」ではなく、「難しい」のニュアンスで使われることもあるということになる。「～できない」だけで逃げる手もあるが、ここでは傍線部工の「思ひさはる」を考慮して後者のニュアンスを「なかなか」の語で訳出しておいた。

さて、「なぞ」は「など」と同じく疑問の副詞「なぜ」であるから、あとは「いでがてに」の「出づ」がどこからどこへ出るのかがわかれればよい。これは上の句に「憂き世」とあることから明白であろう。

(二) 助動詞「す・さす・しむ」は基本的に《使役》の機能を担うが、下に補助動詞「たまふ」を伴う場合はこの補助動詞の意味を強めて《尊敬》の機能を示し、いわゆる《最高敬語》となることも多い（ただしこれは、あくまでも「ことも多い」のであって、単純に《使役+尊敬》と捉えるべき場合も少なくないので注意。識別の要点は、「文法上の主語と実質動作主の一一致・不一致」を勘案して判断することにある。機械的に《最高敬語》と決めつけることのないよう注意しておく）。ここでは動作内容が「官職をとる」取り上げる」であるから、この動作主体は天皇であると判断する。したがつてこの「せたまへ」は《最高敬語》である。なお、天皇を動作主体とする表現は文中にもう一か所だけ見られ、ここでは「おぼす」と通常の敬語が用いられている（最高敬語は「おぼしめす」）ことから、傍線部内を《使役+尊敬》と考えたかも知れない。しかしこの程度の混用は珍しいことではなく、たつた一か所では判断材料に乏しいと考えざるをえない。またこの作品の成立した平安前期は、（人臣摂政がすでに登場しているとはいえ）建前としては政治の主権はあくまでも天皇にある時代である。官吏の任免が本来は天皇の専権行為であることは言うまでもない。

さて、この文中で「官」^{つかさ}という言葉は二度使われている。古代律令制においては「官職」と「位階」とが指示するものは別物であるが、「官位相当」の原則から一般には混同させていた節がある。1行目の「官」はそのあとに「まさりて」と比較対象のあること

が暗示されているので「官位」と訳しておいたが、傍線部では「とらせたまふ」＝「召し上げ」の対象であるので、原則どおり「官職」と考えることができる。あとは、「官職を召し上げる」のであるから、その対象となつた人物と、解釈内容「罷免」まで補つておけば万全であろう。

(三) この設問のポイントは、傍線部に含まれる指示語の指示内容を正確に捉えることである。傍線部の前の表現を見ると、「両親の恩愛」または「両親の恩愛の対象となつた人物」の二通りが考えられる。しかし、「憂き」が少し前の「憂き世にはまじらはで……」(7行目)や後の和歌の「憂き世」に繋がることから「俗世にあることのつらさ」に関係することがわかれれば、傍線部内の「さはる」が「支し障る」の意味を持つことからも、「これ」の内容は「出家の妨げとなるもの」であることになる。「両親の恩愛の対象となつた人物」とは「憂き世にはまじらはで……」から今まさに出家を考慮中の人物であることがわかるから、「これ」とは「両親の恩愛」を指すことになる。

もう一つのポイントは、「憂き」の処理である。単語としての意味は「つらいこと」「つらさ」程度となろうが、しかし「つらさ」が「肉親の愛情」に「支障となる」と考へては、出家を促すものとこそなれ、「憂き世にはまじらはで……」だの、傍線部才の表現だのには決して結びつかない。したがつて、「憂き」が單なるつらさでなく、そのつらさが原因となつておこつた「出家遁世への希求」まで含んでいると考えて、はじめて題意を満たした答案の作成が可能となる。

なお、この設問は直接「現代語訳」を要求するものではないので、問題文の構文にとらわれない答案も可能である。たとえば、「あまりに細やかな父母の情愛が、主人公の俗世への絶望による出家の妨げとなつたということ。」のような形でもよい。これに対しても、訳の要求がある場合は、構文はいじらず適切な語句を補充する姿勢に徹すること。参考とされたし。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--